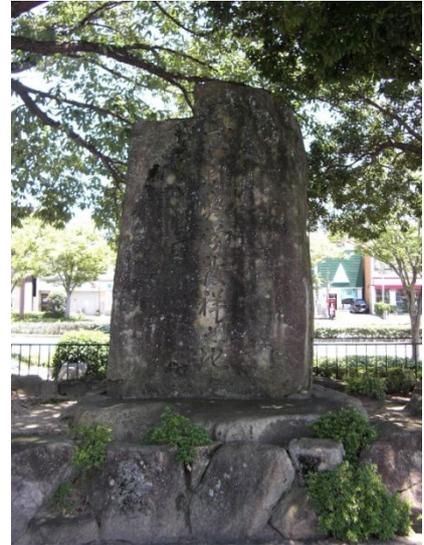


教える道の発祥

山口県の師範教育の推移

政府は教員の養成に特に力を注いだ。文部省は学制の制定に先立って、小学校教員の養成の重要性と緊急性の認識から小学教師教導場建立の伺いを提出し、それを受けて東京に師範学校が設立された。

山口県においても教員不足を解消すべく明治7(1874)年4月、長屋又輔・今田純一を学務掛に任命し、官立東京師範学校で30日間教則を習得させた。両人の帰県後、県は山口と岩国で教員試験所を開設し、県内の教員を30人ずつ入学させ教則を伝授した。さらに、山口の教員試験所では、県内の教員の中から優秀な6人を教則掛副手に抜擢し、山口明倫館内に設けた教場で児童40人に対して、4月から9月まで教則の授業伝授を行った。これが事実上本県最初の教師養成機関であったが、文部省の認可によるものではなく授業伝習所に過ぎなかった。



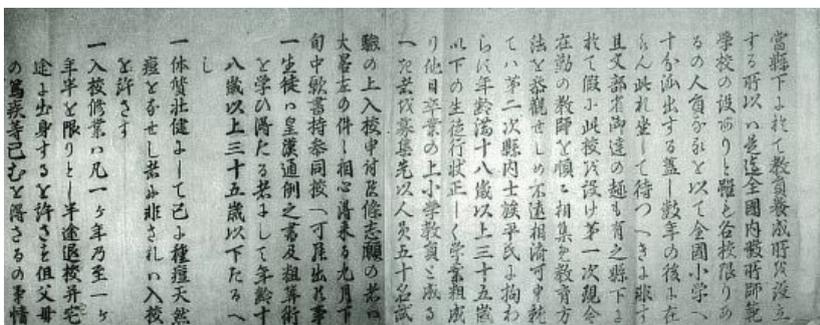
山口教学発祥の碑
(現:山口市役所内)

萌芽期 —山口県教員養成所の設立—

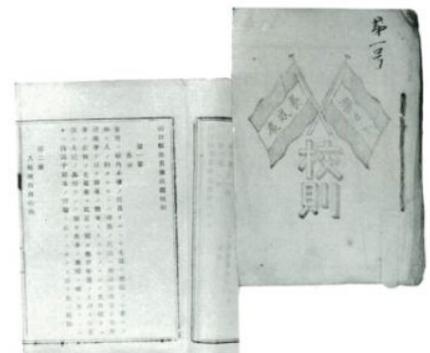
明治7年6月20日、県令中野吾一は、民費で小学校を増設しているにもかかわらず「教員其人ニ乏シク、教則其正ヲ得ス、教育其方ヲ知ラサルニ在リ」という状況であるため、教員養成を急務として文部省に教員養成所の開設を届け出た。

これにより、同年10月1日、教員試験所に隣接した山口洋学寮の施設を使い、山口県教員養成所並びに同附属小学校を設立した。本県の師範教育の始まりである。

養成所第1回の卒業生30名は卒業後、訓導として県内各地の小学校に赴任した。



教員養成所入学者募集告示



教員養成所規則

確立期 一師範学校へー

明治10(1877)年、政府は、官立の師範学校は東京のみとし、それ以外は地方に設立を委ねることとした。これを受け県は教員養成所を「山口県師範学校」と改称し、本格的な教員養成に乗り出した。初代校長は長屋又輔で鴻城学舎の校長と兼任であった。修業年限を1年半とし、文学・数学・史学など11科目を教授した。また、優秀な卒業生を10人選抜して模範教員とし、各地の小学校に赴任させた。

明治12年2月には、修業年限を2年半とし一層の充実を図り、翌年には小学校教員免許授与法を改正、試験を年4回実施することで教員免許の効力の強化と有資格者の増員を図った。また、明治16年1月には、「山口県師範学校改正諸則」を制定し、上司淵蔵が初の専任校長となった。

なお、女子児童の就学率増加にともない、女子教員の必要性が次第に高まってきたため、明治17年、3年制の女子師範学科が併設された。これが山口県における女子教員養成のはじまりとなり、以降、明治28年3月に廃止されるまで107名の卒業生を送り出した。

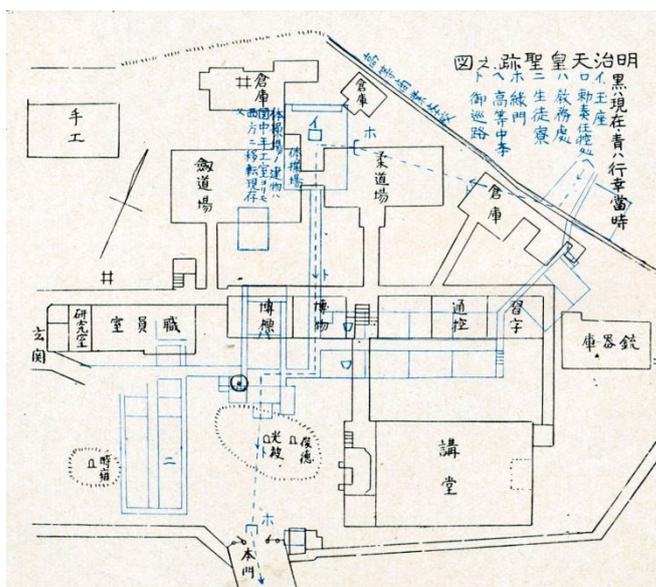
山口県師範学校は明治18年に「山口師範学校」と改称。同年7月には明治天皇行幸という名誉を受けた。



山口師範学校卒業写真(明治18年)



明治17年及び18年入学女子師範学科生



明治天皇行幸の図(青い線の部分)



行幸記念「光破」の碑
伊藤博文に上司校長が頼み作られたもの

充実期 —山口県尋常師範学校—

明治19(1886)年4月、師範学校令が公布され、師範学校は、小学校教員を養成する尋常師範学校と、尋常師範学校・尋常中学校の教員を養成する高等師範学校に分けられた。高等師範学校は官立で東京に1校のみとした。これが戦後の新学制まで続く日本の教員養成の原型となる。

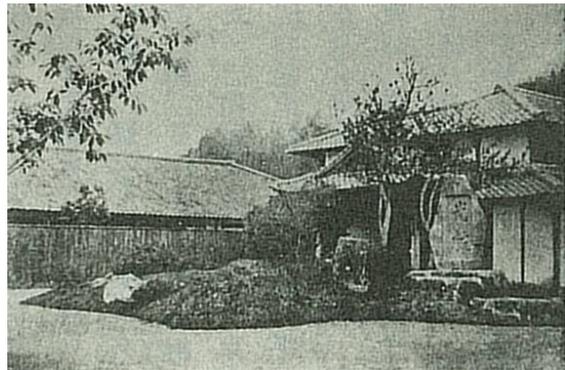
これを受けて、県は同年、山口師範学校を「山口県尋常師範学校」と改称する。この尋常師範学校は明治31年まで続き、師範教育の基礎を確立し、充実させていった。

修業年限4年とし、その学科科目は倫理・教育・国語等19科目で、農業・手工・兵式体操は男子生徒に、家事は女子生徒に課した。当時の師範学校における兵式体操は最も重要な学科であり、生きた修身科として師範教育の性格を象徴するものであった。

明治20年には附属小学校に幼稚保育科を新設し、これが現在の教育学部附属幼稚園の基となる。

また、自費生をやめ給費生とし、気質の鍛練と教育者の人格の養成を図るため、全寮制による兵式管理を行った。寄宿舎の兵営化は、同時に生徒の日常の兵営化でもあり、教育実践上の影響は大きかった。

明治31年、師範教育令の制定を受け「山口県師範学校」と改称した。師範教育令で「順良信愛威重ノ徳性ヲ涵養スルコトヲ務ムヘシ」とうたわれた三徳性^{かんよう}の涵養は、わが国の師範教育の根幹をなす考えとなり、これは敗戦までおよんだ。

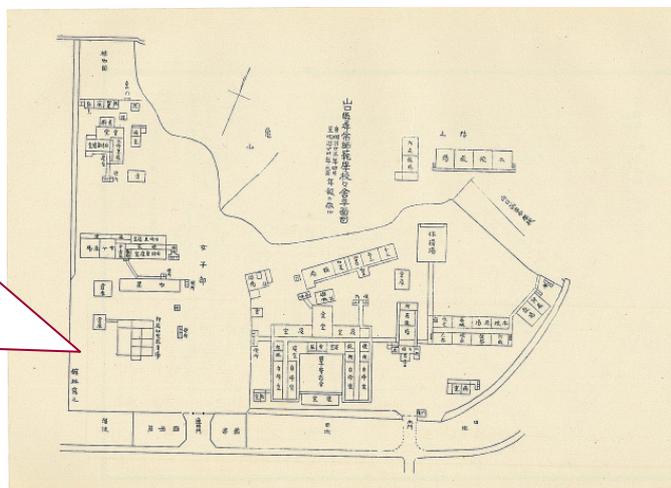


校舎(明治20年頃)



修業證書

「木村ヒサ」は現在の中村女子高等学校の発展に欠かせない人物となった



整備拡張され充実した校舎図(明治24年頃)

師範教育の先駆者 かみつかさえんぞう 上司淵蔵



嘉永2(1849)年4月16日、周防国佐波郡(現在の防府市)宮市に生まれる。上司家は代々「東大寺候人」(奉公人)として周防国衛に在住していた。

初め三田尻の越氏塾で学び、明治元年に山口明倫館に入学。その後舎長となり明治5年、山口中学の助教として任用される。その後、教員養成所の幹事兼教師となる。明治16年9月、山口県師範学校長となり、明治29年の辞任まで13年間の長きにわたって生徒の教育と学校の発展に尽力した。山口県の教員養成は上司のもとで急速に進展し、教える道の先駆者として今もなお尊敬されている。

「先生の師範学校にあるや、生徒を愛すること子の如く

学校を愛すること家の如く」

上司は生徒を厳しく教育したが、生徒からは「叱責せらるれば叱責せらるるほど益々先生の許にいきたくなる」と慕われた。忠孝にして義勇、特に皇室を尊ぶ心は強く、常に世の進歩のために率先して実行する人だったという。

墨蹟の収集

明治12、3年頃より、儒学の墨蹟の蒐集をはじめ。「福澤の説流行して、儒学は殆ど世に捨てられたるが、余はかの維新事業も徳川三百年の涵養したる儒者の力多きに居ると思ひ、せめてその墨蹟なりとも散逸せしめず、保存して他日の資とせむ考なり」という信念のもと、20年ほどかけて約百二十もの墨蹟を蒐集した。

亀山に毛利公銅像建立

忠孝を重んじる上司は忠正公勤王の功を敬い、銅像建立に大いに貢献した。その功を讃えられ、毛利元昭から祝いの歌を頂戴した。明治33年4月15日、毛利敬親を含め五基の銅像を亀山に建立。この銅像のうち毛利敬親のもののみ今の亀山に残っている。



亀山に建立された銅像